

〈報告〉

オンライン授業の実践から見えた
日本語学校の対面授業の意義

志賀村 佐 保

1. はじめに

現在、日本語教育は大きな転換期を迎えている。2020年、新型コロナウイルスの影響により、日本語学校や大学、企業研修などでも、オンラインによる日本語教育の需要が一気に高まった。感染拡大防止策の一環として、世界中の多くの教育機関がそれぞれの場や内容に応じた様々な形のオンライン授業を実施するに至り、現在、多くの研究者によりその事例報告や今後の展望が発表されている。その中でも、日本語学校^(註1)におけるオンライン授業という形態は、これまでの常識を覆す新たな授業形態であり、日本語教師、日本語学習者双方にとってのチャレンジとなった。オンライン授業に関しては日本と海外をつないだオンライン授業を展開する教育サービスが既に数多く存在している。しかし、本来、対面で行われるはずの教育機関での授業が、外的な要因により突然オンライン授業となったのは日本語学校では初めての経験であった。筆者自身も日本語学校に勤務しており、今回のコロナ禍において日本語学校の対面授業を急遽オンライン授業に切り替え、試行錯誤しながらオンライン授業を行った日本語教師の一人である。これまで行ってきた対面授業の経験をもとにオンライン授業を行う中で、オンライン授業のメリット、デメリットを感じる日々であった。オンライン授業は、時間的、地理的、経済的な制限から解放されるというメリットがある一方で、これまでの対面授業を持ち込むには一定の工夫が必要であり、これまでのやり方ではやりにくいというデメリットも感じた。その、オンライン授業で感じたデメリットこそが、オンライン授業では成し得ない教室活動であり、対面授業の意義になるのではないかと思われる。本稿では今回、外的要因によって突然オンライン化された日本語学校の授業の実態と、日本語教師（以下、「教師」とする）、日本語学習者（以下、「学習者」とする）双方に対するインタ

ビュー調査とアンケート調査の結果を報告する。それぞれが日本語学校におけるオンライン授業についてどのように感じたのかを探ることで、日本語学校の対面授業の意義について考察することを目的とする。

2. オンライン授業の実践報告に関する先行研究

オンライン授業の実践報告は現在多数挙げられている。まず、ここでいうオンライン授業を定義しておきたい。オンラインで行われる遠隔授業は、その形態を同期型、非同期型、同期・非同期統合型に分類することができる(久國他1998)。同期型は教師が遠隔地の学習者に対して双方向型のツールを使ってリアルタイムで授業を行う形式である。非同期型は教師があらかじめ録画していた動画教材をオンデマンドで配信し、学習者が遠隔地からその動画にアクセスし、自主的に学習するシステムである。本稿で取り扱うオンライン授業とは教師と学習者がリアルタイムで授業を行う同期型の授業のこととする。

日本語教育のオンライン授業には教師と学習者が1対1で行うプライベートレッスンと、複数の学習者が同時に参加するグループレッスンがある。また、グループレッスンの人数は2～3人程度の少人数の場合もあれば、大人数を対象にした講義型のものまで多岐にわたる。また、使用ツールはweb上の会議システムzoom^(注2)やteams^(注3)、skype^(注4)、中国のオンライン教育システムclass in^(注5)などを使った授業が報告されている。

オンライン授業についてはすでに様々な研究がされており問題が指摘されている。先行研究は大きく分けて2つある。1つはオンラインにおけるコミュニケーションに関するものであり、例えば藤本(2019)は、システムの不具合からの負担が教師のやりづらさという感覚を生んでいると述べており、通信環境や通信速度の差によっておこる問題や、視線の不一致や、見える範囲や動きの制限などにより微妙な感情を読み取ることが難しいことなどが挙げられる。また、岩井・峯崎(2020:37)もオンライン上のコミュニケーションについて「インターネット環境への依存度が高いために起きる問題があり、出欠確認から発言、タイムラグが起きることなど全てに時間がかかる問題、学習者のインターネット環境が悪く接続不良により授業参加が困難になるケースなどが見られた」と述べ、その困難点を指摘している。

もう一つは、授業実践に関するものである。岩井・峯崎(2020)は、韓国

における初級レベルのオンラインでの日本語教育の実践での困難点と利点を述べている。困難点は上に挙げた点であり、利点としては「移動時間が無くなることによる負担軽減」「資料のデジタル化による保管の利便性」「労働環境の効率化」が挙げられている。また後藤（2020：41）は、韓国の大学における会話の授業報告の中で動画による授業（オンデマンド）とzoomによる授業を行った結果、オンデマンドは「即座にフィードバックを返すことが難しく、また学生が教師からももらったフィードバックを見て修正しているのかどうかも不明である。」という問題点が改善されるという意味において、zoomの方が適していると述べている。日本国内のzoomを使用した実践報告としては、三宅他（2021）がオンライン授業の振り返りを通して、オンライン授業の悪い点についてネットワーク環境に関する問題と、学習上の問題を挙げている。学習上の問題としては「対面授業での授業中であれば、すぐに確認できるワークシートの添削にも、オンライン授業では時間を要する。おとなしい学生を参加させながらクラスの一体感を作るのが難しい（三宅他2021：9）」ことを指摘している。

このようにオンライン授業に関しては様々な研究がされているが、オンライン授業の実践の中で垣間見えた対面授業の必要性や対面授業における教師の在り方について言及されているものは少なく、日本国内の日本語学校の教師や学習者を対象にしたオンライン授業の実態調査は管見の限り見当たらない。

今後、オンライン授業もうまく取り入れたハイブリッド型の授業が展開されていくことになることは容易に想像できるが、オンライン授業という存在もある中での対面授業にもとめられている教師の役割や対面授業の在り方はどのようなものだろうか。学習者が対面授業に求めているものは何なのだろうか。オンライン授業で感じた「やりにくさ」を解消する対面授業の役割とはどのようなものなのだろうか。本稿ではこれらの問題意識に基づき、オンライン授業を経験した教師に対するインタビュー調査と、オンライン授業を受講した学習者に対するアンケート調査から日本語学校における対面授業の意義について明らかにしたい。

3. 調査方法

2020年10月に、オンライン授業経験者の日本人教師3名（以下、「協力者

A)「協力者B」「協力者C」とする)に対してオンライン会議システムzoomを使ってインタビュー調査を行った。調査項目は①授業内容、②オンライン授業で工夫したこと、③オンライン授業で感じたメリット、デメリットである。

また、このインタビュー調査の中から出てきたキーワードを基に選択式のアンケート用紙を作成し、オンライン授業を受けた日本語学習者32名に対してアンケート調査を行った(補足資料参照)。なお、アンケート用紙の選択肢は日本語学習者の言語能力に鑑み日本語母語話者のインタビュー調査結果を基に学習者向けに言葉を変えて選択肢を作成した。さらに10名の学習者に対して聞き取り調査としてフォローアップインタビューを行っている。

<調査対象者>

協力者Aは、2020年のコロナ禍においていち早く韓国でオンライン授業へ切り替え対応した日本語教師で、教師歴18年、30代女性である。協力者Aが担当した授業は、専攻と教養科目の授業があり、専攻の科目としての日本語クラスは大学1年生の初級日本語会話、2年生は中級日本語会話、3年生はビジネス日本語会話であり、それぞれ20名程度の人数構成である。教養科目としての日本語クラスは、いろいろな学科の学生が入ってくるが、基礎的な日本語会話の授業で、クラスは30名である。教材は韓国で発行されているもので、オンラインでも教材は変えずに使用した。文法的なことは韓国人の教師が指導することになっており、日本人教師は会話を中心に教えることになっている。協力者Aが担当している授業はブレンディッドラーニング(反転授業)なので、あらかじめ動画を見ておいて、それをzoomの授業で実践するというのが基本的な流れとなる。教材もあらかじめパワーポイントで録画しておき、それをアップロードして課題としてあらかじめ見ておくことが条件となる。

協力者Bは、東日本の日本語学校で今回のオンライン化に対応し、また、それ以前から中国のオンライン教育サービスclass inでのオンライン授業の経験もある日本語教師で、教師歴3年、50代女性である。今回のコロナ禍において1か月程度の準備期間を経て2020年5月より日本語学校の授業のオンライン化に対応した。担当科目は作文であり、作文の授業そのものはオンライン授業では難しかったので、文法的な要素を含んだ授業に切り替えた。教科書は『留学生のためのここが大切文章表現のルール(スリーエーネットワー

ク』を使用している。中国のオンライン授業は最大6名のグループレッスンでレベルは初級から中級であり、パターンプラクティスが主な教室活動である。

協力者Cもまた、西日本語学校でオンライン化に対応し、それ以前からオンライン教育サービスclass inを使ったオンライン授業の経験もある日本語教師で、教師歴3年、50代女性である。

今回のコロナ禍において協力者Bと同様のタイミングでオンライン化に対応した。担当は初中級クラスである。クラスの人数は17名で、教科書は『みんなの日本語Ⅱ（スリーエーネットワーク）』を使用している。

協力者の選定は以下の理由によるものである。今回のコロナ禍という外的な要因において、オンライン授業未経験でありながらも想定外のタイミングで、急遽対面授業からオンライン授業に切り替えることを余儀なくされた日本語教師は多かったと思われる。その中で対面で行われていた日本語教育を、いち早くオンライン授業に切り替え、取り組み始めたことから、協力者Aに協力してもらった。また、日本語学校の実態調査をするにあたり、日本語学校以外の教育現場ではどのように対応したのかを探るために大学に勤務しているAに協力を依頼した。B、Cについては、すでに構築されたオンラインシステムによるオンライン授業の経験が既にあったうえで、今回のコロナ禍における日本語学校の対面授業からオンライン授業への移行も経験したことから協力を依頼した。

4. 調査結果

4.1 日本語教師が感じたオンライン授業でやりにくかったことは何か

4.1.1 オンライン会議システムzoomの機能に関すること

「(zoomのブレイクアウトルーム機能に関して)全体が見えないので、グループワークが進んでいないグループの確認などがしづらいのがデメリットだった」(協力者A)

「画面共有すると学生の顔が見られなくなるのはzoomのデメリットだった。(中国のオンライン教育システム) class in は画面にテキストが映し出された状態でも画面上部には学生の顔が一覧できるようになっているから」(協力者B)

今回の外的な要因からオンラインへの急な変更を余儀なくされたことに起因して、多くの日本語教師が模索しながら進めていたのだが、教師が感じている「やりづらさ」は藤本（2019）に「通常の対面授業をオンライン授業でも置き換えて行おうとしそれがうまくいかないことが多い。」とあるように、多くの日本語教師がこれまでの経験に基づいた対面授業をそのままオンライン授業に反映させようとした。そのため、時間的、空間的な制約から解放されたオンライン授業にメリットも感じた反面、画面に限られた情報しか映し出されないことにやりにくさを感じていた。机間巡視も、zoomであれば手元のボタンで画面がすぐに切り替わるので時間のロスがなく、発表もグループごとに画面共有機能で発表資料を提示できることからグループワークを取り入れやすかった反面、教室全体が見えないことにより、各グループの進捗の確認をするために教師は、各ブレイクアウトルームに入って数回確認作業をしなければいけない。全体が把握できていれば、グループワークの時間を早く切り上げるべきか、もう少し伸ばすべきかなども含めて調整しやすい。

また、教室活動の板書に変わる資料を提示する画面共有システムを使うと、学習者の画面が映し出されないので、説明をしている間に、学習者の表情を読み取るなど様子をうかがうことができないというやりにくさもあった。表情や視点に関しては「Zoomは18名の学習者全員の顔が一覧できるが、どこに視点を置いていいかわからない。（協力者B）」という問題も存在する。

さらに、「担当したのは作文の授業だったため、対面式のように書かせる手元も見えないし、個別対応できないことになる（協力者B）」という問題もあった。学習者の上半身しか映し出されないことで、指導内容によってはやりづらくなるものも確実に存在するのである。対面式の授業でしていた教室活動をオンライン授業に反映させる場合、これまでの教室活動では必要とされていなかった新たなコミュニケーション方法が必要になってくることになるだろう。教室活動の中で、学習者の理解度を確認するために問題を解かせる場面は多々あるが、その際に、「口頭で回答させるかチャットで回答させるか、そもそも学生がキーボードで日本語を打てるのかが課題だった。（協力者B）」これまでの教室活動ではノートやプリントに記入させたり、口頭で答えさせるなどして理解度を確認することが多かったが、オンライン授業では手元が見えないことで、学習者が記入したノートの確認方法が問題となった。オンライン授業の際は学習者がキーボードで、日本語を入力できる

能力が必要とされるだろう。筆者が勤務する日本語学校においては、日本語での入力方法の指導をしておらず、キーボードで日本語の入力する指導をしているところは、未だに少ないことが予想される。

4.1.2 学習者の自律性に関わるもの

「グループワークも学習者同士で自律的に活動していかなければ成立しない教室活動の一つだった」(協力者A)

「オンライン授業は学生側の自律的な学習態度が要求される」(協力者A)

「オンライン授業は絶対に予習をしておくことを条件にしないと進まない。自主学习ありきの授業になる。自分のモチベーションをキープできるようなシステムづくりをする必要がある」(協力者B)

「協働学習だとしてブレイクアウトルームで学習するとしたら(教師は)ファシリテーター的な役割になる。」(協力者B)

「友達の課題の答えを丸写ししているようだが、チェックする術はない。学生を信じるしかない。」(協力者C)

協力者A、Bが対面授業からオンライン授業に変わったときに感じた「やりづらさ」は学習者に自律的に動いてもらわなければいけないという点であった。対面授業は、教師と学習者双方に一定の緊張感が生まれ、集中を促すことができるが、オンライン授業の場合は、見える部分が限定的であるため学習者の行動が把握できず、教師側が学習者の集中を促すなどの支援がしづらくなる。仮に手元で別の作業をしても教師が確認する術はないため、これは試験などを行う際にもカンニング防止などの観点からも課題となったオンライン授業におけるデメリットであった。画面に映し出されていない手元で仮に携帯電話を操作するなどの学習と関係のないことをしていても教師は気付きにくい。それゆえ、授業中であっても教師が適切なタイミングで助言をするなどの働きかけから学習者の集中力を維持することも難しくなる。

よって、学習者に日本語学習に対するモチベーションや学習意欲のコントロールを委ねることになるのである。モチベーションに関しては、協力者Bは「(日本語学校では)友達に会えることもモチベーションを上げる要因になっているようだ」と述べており、実際に人に会うことが、学習者のモチベーションを維持するための一因となっている可能性も否定できない。

4.1.3 学習支援に関すること

「時間のロスがなくてやりやすいが、理解度の把握が難しく、一方的な授業になりがち」(協力者A)

「(学習者が) どこがわからなくて止まっているのかを感じてあげられるのはオンラインよりも対面の方が感じてあげやすい。」(協力者B)

「オンライン授業はことばにするから力が付くが、言葉にしなかったら、そのまま流されてしまう。」(協力者C)

対面授業であれば、教師は学習者の手がとまっていたら、学習者が自ら意思表示をしなくても学習者が支援を必要としていることに気付くことができる。一方でオンライン授業では手元が見えない、表情が読みにくいという特性から教師からの積極的な学習支援が困難になる。また、学習者も疑問があったとき、対面授業であれば指で示すなどの方法で質問できるが、オンライン授業では常に言語化して質問をしなければならず負担となっている。

さらに、学習者も疑問があったとき、オンライン授業では常に言語化して質問をしなければいけない。そうすると、質問をするという行為自体のハードルが挙がってしまう。これに関して協力者Bは、「(教えている技能実習生たちが働いている工場での作業中に日本人従業員との他愛もない会話の中から得た方言などに対しての疑問があったときなどは) 対面授業の場合は教師に聞きやすいようだ。(対面授業であれば) 発音が悪いのもクリアできる。」と述べており、対面授業であれば、質問の内容を吟味するなど、正確に言語化しなければいけないというハードルが下がり、気楽に質問できる環境を整えることが期待できる。また、協力者Bは学習者の質問に対して回答するタイミングの問題についても「(対面授業なら) 質問を内容によっては後から答えるというような回避ができる。オンラインだとラインを切ったら終わってしまう関係なので、後から答えるというのは有効ではない。」と指摘している。つまり、時間の制限があって回答ができなかった場合も、対面授業であれば休み時間などに臨機応変に対応することが可能だが、オンライン授業は、場合によってはネットワークを切ってしまったら授業も終わってしまうので、改めて別の時間をとることが難しいと述べている。学校に通うというのは、教師と学生が自然にコミュニケーションがとれ、疑問の解消も気軽に

図れる環境であるということである。

4.1.4 コミュニケーションに関すること

「オンラインは言葉でしかコミュニケーションは成立しないが、人間のコミュニケーションは言葉だけではなく空気感とか場の共有とかがオンラインでは出せない」(協力者A)

「言葉以外の情報を得られるという意味では留学したり日本にいたりするのは大きい。言葉以外の情報の面が80%。コミュニケーションはことばだけで行われているわけではない。オンラインでのやりとりは授業に限らず顔見で話すところまではパーフェクトにできていてもその他の部分がない。対面では話はきちんとできるけど、会話が始まる前や終わった後の振る舞いが決める部分もある。」(協力者B)

「(対面授業で)話を意図して聞いているわけではないが、耳に入ってきたことがヒントになって(学習者の)発話が促されている気がするし、(教師も)授業の進行も適宜変えやすい」(協力者C)

協力者A、B双方のインタビューの中に「オンライン授業であれば言語でしかコミュニケーションは成立しない」という回答があった。画面に映っている上半身部分だけではノンバーバルなコミュニケーションの部分はかなりの割合で欠落してしまっていると考えられる。コミュニケーションに関しては、発話によるコミュニケーションと身振りや手ぶりなどの動作や物言いなどによるコミュニケーションに大きく二分される。そのうち後者はノンバーバルコミュニケーションと呼ばれている。ノンバーバルコミュニケーションに関してはRay L.Birdwhistellが、“Our present guess is that in pseudostatistics probably more than 30 to 35 per cent of a conversation or an interaction is carried by the words. Microcultural analysis (注6) offers objective measures of at least a portion of the remainder (Birdwhistell 1970: 157-158)”と述べており、言語による情報判断が3分の1であり、残りの3分の2が、非言語コミュニケーションによる情報判断だとしている。

つまり、オンライン授業においては人間のコミュニケーションの大半を占めているノンバーバルな部分かなりの割合で欠落してしまっていると考えられる。それにより、言語として表れていないものに関しては得られる情報

も限られてくる。ここに対面授業の意義が見い出せるのではないかと考えられる。

4.2 日本語学習者が感じたオンライン授業でやりにくかったことは何か

2020年5月から急遽オンライン化された授業を経験した仙台市内の日本語学校の初級日本語学習者32名^(注7)にアンケート調査を実施した。学習者の言語能力に鑑み協力者A、Bのインタビュー調査結果から抽出されたキーワードをもとに選択式のアンケートとしている。なお、アンケート用紙を回収しながら、口頭でも聞き取り調査を行った結果も以下に記す。

今回、学習者が受けた授業は以下の通りである。授業は通常の対面授業が行われるはずの時間と同じ時間に開始し、1コマ50分の授業を1日4コマ行う。学習領域^(注8)も、対面授業で行われる予定であったものを基本的にそのまま行った。オンライン授業の環境が整うまでの1か月間を休校としていたため、その期間の授業時間分を補うために自習用の課題提出を義務付け指定された提出日に提出させた。

表1. オンライン授業はどうでしたか（単位：人）N=32

	1	2	3	4	5	
わかりにくい	10 (31.3%)	5 (15.6%)	8 (25%)	1 (3.1%)	8 (25%)	わかりやすい
たのしくない	12 (37.5%)	5 (15.6%)	5 (15.6%)	1 (3.1%)	6 (18.8%)	たのしい
不便	4 (12.5%)	5 (15.6%)	4 (12.5%)	2 (6.3%)	13 (40.6%)	便利
もう受けたくない	12 (37.5%)	6 (18.8%)	3 (9.4%)	1 (3.1%)	7 (21.9%)	また受けたい

表中に示す1～5の数字は5段階でどのくらいの程度そう思ったかを示している。

わかりやすさに関して、表1に示すように、もっとも多かった回答は「わかりにくい」が10名で、31%だが、「わかりやすい」に関して、8名であり25%を占めている。「どちらでもない」を意味する「3」よりも「わかりにく

い」「たのしくない」方へと回答した学習者の方が「わかりやすい」「たのしい」と回答した学習者より若干多いが大差はなく、全体として、オンライン授業に対して学習者自身も教師同様に、メリットもデメリットも感じているようであった。また、便利かどうかについては「便利」の4、5に回答した学生が15名（47%）、「不便」1、2に回答した学生が9名（28%）で、オンライン授業の利便性を認める回答が得られた。

オンライン授業を経験した結果、「もう受けたくない」と回答している学生が過半数となったことに注目したい。この結果から、オンライン授業にはメリットもデメリットも感じたが、選べるならオンライン授業より対面授業を選択したいという学習者の傾向がわかる。

次にオンライン授業のどのような点を評価しているのかを探るために、どうしてまた受けたいのかを聞いた結果を以下に示す。表2に示すように、また受けたい理由に関して学校に行かなくていいという物理的な利便性が挙げられた。また、フォローアップインタビューで、コロナ禍において安全性が確保されるといった安心感を意味するコメントも得られた。

表2. どうしてまた受けたいですか

	回答数（人）N=32
学校に行かなくていい	6（18.8%）
わかりやすかった	6（18.8%）
家でリラックスできる	5（15.6%）
たくさん話せた	5（15.6%）
movieがわかりやすい	4（12.5%）
字が見やすかった	2（6.3%）
その他	安全

次に、やりづらかったことを探るために、どうしてもう受けたくないのかを聞いた結果を表3に示す。

表3. どうしてもう受けたくないですか

	回答数（人）（N=32）
音が聞こえにくい	10（31.3%）
画面が小さい	9（28.1%）
インターネットの状況が悪い	9（28.1%）
友達に会えない	8（25.0%）
先生にチェックしてもらえない	6（18.8%）
宿題が多い	6（18.8%）
おもしろくない	6（18.8%）
質問ができない	4（12.5%）
スピードが速い	4（12.5%）
目が合わない	4（12.5%）
字が見えない	3（9.4%）
メモができない	3（9.4%）
その他	・先生の説明が分かりにくい ・学校で課題があって交通費がかかった

学習者が主に感じているやりづらさは、「音が聞こえにくい」という回答が10名で31.3%と最も多く、音声に関することが挙げられた。また、次に多かったのは「画面が小さい」「インターネットの状況が悪い」でそれぞれ9名、28.1%であったが、これは、突然のオンライン化に伴い準備期間もなく、手元にあった端末のみで急遽オンライン授業を受けなければならなくなったという背景がある。日本語学校に通っている学習者のほとんどは、表4に示す通り、パソコンを持っておらず、手元にあった端末はスマートフォンだけであったため、スマートフォンで受講したために画面が小さくて、文字が見えにくいという回答が多かったと考えられる。

表4. オンライン授業の時に使ったものは何ですか

	回答者数 (N=32)
携帯電話	18 (78.3%)
パソコン	5 (21.7%)
イヤホン	2 (8.7%)
i-phone	2 (8.7%)
教科書	1 (4.3%)
マイク	0

一方、学習者の中でパソコンや、少し大きめのタブレット端末で受講した学習者からは「画面が小さい」「字が見えない」などの回答はなかった。数回の授業の後、この状況が分かったことから、教師側は画面共有する資料の作り方の工夫を試みた教師もいた。その一人である協力者Bは「学生を使用している端末がスマホだったため（画面が小さくて）、パワーポイントの作り方が大事だと感じた」（協力者B）と述べている。また、「スピードが速い」に関しては、普段の対面授業であれば絵カードなどを手元に準備したり、めくったりする時間が存在するが、zoomの画面共有機能を使いパワーポイントを使用することにより、時間の節約ができたために、授業の進行も実際にスピードが速くなり、「（音声をミュートにさせているため）一方的になりがち（協力者B）」な印象を与えたようである。また「絵カードの代わりにビジュアルエイズがどんどん出せるのはメリット（協力者B）」「時間のロスがなくなる（協力者A）」ために、教師側はスムーズな授業が展開できたと評価している反面、スピードが速いため、学習者は「メモができない」という回答も出てきたものと思われる。また、「質問ができない」という回答に関しても、次々と授業が展開されるために、質問を言語化しなければいけないという負担とともに、質問をするタイミングもなかったのも理由の1つなのではないかと考えられる。さらに、教科書は手元に用意して授業に臨むように指示されていたにもかかわらず表4に示す通り、「教科書」と回答した学習者が少なかったこと、表3に示す「メモができない」の回答が多かったことから、メモを取る時間もないほど授業のスピードが速く、画面に集中してしまったことで、教科書に対する印象は薄くなってしまったものと考えられる。さらに、聞き取り調査において、「今回、オンライン授業を経験した上

で、もし、今後オンライン授業と対面授業を選択できるとしたらどちらを選ぶか」という問いに対して、「対面授業を受けたい」と答えた学習者が圧倒的に多く、「質問ができない」ことを理由にあげていた。中には、「教室だったらわからなくて考えていたら先生が来てくれるけど、オンラインの時はわからなくてもどんどん授業が進む（ベトナム人学生）」と述べており、学習者は教師からの積極的な気付きを待っているということもわかる。これに対して、教師側も、「どこがわからなくて止まっているのかを感じてあげられるのはオンラインよりも対面の方が感じてあげやすい（協力者B）」と述べていることから、オンライン授業では実現できない学習支援であるといえる。

また、コミュニケーションに関しても「目が合わない」ことで、誰に対して発言しているのかわからないために、名前を明言するなどの工夫を施さなければならぬなどのオンライン授業特異のコミュニケーションスキルが求められる。これらに対する不慣れもオンライン授業のやりにくさの一因なのではないかと考えられる。

日本語学校に通う学習者の中にはいつもより（対面授業の時より）「宿題が多い」ことで今後オンライン授業を受けたくないと回答した学生もいた。協力者Aの勤務する大学ではLMS（Learning Management System 学習管理運営システム）に課題提出する形式を取ったため完全にオンライン化できていたのだが、日本語学校の場合はそのようなオンラインシステムが構築されておらず、学習者は課題を提出するためだけに学校に定期的に行っていた。普段の対面授業であれば課題を提出するために学校へ改めて行くことはないのだが、今回のオンライン授業では、休校にした時間分を取り戻すために、指定された日に課題の提出をしに行かなければならない。この回答はこのような事情から負担が生じたため得られた回答だと推察する。

5. 対面授業でしか実現できないことと日本語学校の存在意義

今回、多くの日本語教師がオンライン授業に感じた「やりづらさ」は「通常の対面授業をオンライン授業でも置き換えて行おうとしそれがうまくいかないことが多い（藤本2019）」ことにある。そのため、オンライン授業にメリットも感じつつも、画面に限られた情報しか映し出されないことにやりにくさを感じた。また、今回の調査から、日本語学校における対面式授業の存在意義は、「空気を共有すること」に他ならないと感じた。言語に特化した

授業を展開できるという特性からオンライン授業の方が効率的に言語能力は伸びる可能性はある。しかし、初級学習者においては「わからない」部分を言語化することが難しく、教師側からの積極的な気付きを学習者側も期待していることがわかった。同時に教師側にも学習者の言葉にならない「わからない」という空気を積極的に感じ取るためにはオンライン授業ではなく対面授業の環境が必要であることがわかった。また、オンライン授業は対面授業に比べて時間のロスがなくなるというメリットがあったが、教師側が感じていたグループワークのために机を移動する時間などの「時間のロス」も、学習者にとっては時間のロスではないのかもしれない。今回具体的な答えは出なかったが、この時間のゆとりこそ、学習者の気持ちを切り替える時間であったり、考えをまとめる時間であったり、なにかしら有効に働きかけているのではないだろうか。そのあたりは今後の課題としたい。

さらに、日本語学校へ留学するということは日本語を学習するだけではなく、「言葉以外の情報を得られるという意味では留学したり日本にいたりするのは大きい。(協力者B)」のではないだろうか。「(技能実習生は)教室で学習したことではなくて実社会でキャッチした情報の量が大きいかもしれない。印象も強いかもしれない(協力者B)」と述べられているように、語学留学といっても、日本で生活することによって、教室で学習すること以上に得られる情報も多いと言えるだろう。

今後オンライン授業等形式がなくなることはないと思われる。その中で、対面授業の意義をオンライン授業にどのように取り入れていけるのかは今後の課題としたい。

6. おわりに

オンライン授業と対面授業という全く別の授業形態に対して同じ教室活動や学習支援を望むことは、当然、無理が生じる。オンライン授業という新たな授業形式が一般化してきた現在において、対面授業でしかなしえない教室活動を再確認し、学習者のニーズと時代にあった日本語教育を目指していきたいと考える。

注1：日本語学校は日本国内外に存在し、日本国内においては法務省より告示を受けた日本語教育機関を特に指しており、学校登録されているものは

専修学校、もしくは各種学校となっている。これらの学校への入学者は在留資格が認められる。文化庁国語課による「令和元年度国内の日本語教育の概要」によると令和元年度11月1日現在法務省告示機関は618校で日本国内における日本語教育機関全体の24.3%を占めている。

日本語学習者数は年々増加傾向にあり、東日本大震災の影響を受けて一時的に減少したが、その後は順調に増加を続けている。「令和元年度国内の日本語教育の概要」によると、日本語学習者数は277,857人となっている。そのうち、日本語学校を含む法務省告示機関で学習する日本語学習者数は11,172人となっている。学生の主な出身地・地域は、中国、ベトナム、ネパール、台湾、韓国などであり、主な傾向としては数年前に比べるとベトナム、ネパールが増加傾向にある。

注2：zoomとは、zoomビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用したWeb会議サービスの名称である。zoomサービス内にミーティングルームを開設し、ミーティングIDやパスワードを共有するユーザー同士で多地点と同時にWeb会議を行うことができるため、今回のコロナ禍において、急遽オンライン授業に切り替えるにあたり使用されたツールの1つである。

注3：teamsとは、マイクロソフトが、Windows、MacOS、Linux、iOS及びAndroid向けに開発・提供するコラボレーションプラットフォームであり、Microsoft365アプリケーションの一部である。会議のスケジュールやアドホックな作成が可能で、チャンネルを訪れたユーザーは現在会議が進行中であることを確認できる。今回のコロナ禍において使用が報告されたツールの1つである。

注4：skypeはマイクロソフトが提供するクロスプラットフォーム対応のコミュニケーションツールである。ユーザー間で、1対1またはグループでの無料音声・HDビデオ通話が可能なため、以前から海外とのオンライン教育で使用が報告されているツールの1つである。

注5：class inは2015年に中国の北京翼鷗教育科技（EEO）が提供を開始したサービスで全世界で2万以上の教育機関に採用され、これまでに1200万人以上の生徒や学生へのオンライン授業に使われてきた。動画による多人数の授業を簡単な操作で行え、中国の北京大学や大手学習塾のほか、海外の大手教育機関とも提携している。

注6：ここでいうMicrocultural analysis（文化のマイクロ分析）とは、カメラ、テープレコーダー、ビデオフィルムなどを駆使して撮った Birdwhistell の記録のことで、人間行動を客観的に観察することをいう。

注7：アンケートに協力してもらった32名の学習者の国籍はネパール人16名、ベトナム人12名、中国人4名である。

注8：一週間の学習領域は、文法4コマ、聴解4コマ、読解6コマ、JLPT対策2コマ、作文2コマ、文字語彙2コマである。

＜参考文献＞

岩井朝乃、峯崎知子（2020）「大学の教養科目における初級日本語の同期型オンライン授業——対面授業との比較を通して探る特徴と課題——」『韓国日語文学会夏季オンライン国際シンポジウム予稿集』 pp.35-38

後藤歩（2020）「大学における日本語会話授業実践報告——講義動画及びzoomでの授業を通して——」『韓国日語文学会夏季オンライン国際シンポジウム予稿集』 pp.39-43

久國正吉、田村武志、佐藤博文（1998）「分散協調学習システムの構築とその評価」『電子情報通信学会技術研究報告ET教育工学』 98（259） pp.35-40

藤本かおる（2019）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究——担当教師へのインタビューを中心に——」『JeLA学会誌』 Vol.19 pp.27-41

文化庁 「令和元年度国内の日本語教育の概要」

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r01/（閲覧日2020年5月1日）

三宅祐司、久野かおる、小出寿彦、津坂朋宏、波村慎太郎（2021）「zoomによるオンライン授業の振り返りと課題——双方向対話型の授業展開を目指して——」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.27 No1 pp.8-9

Ray L. Birdwhistell（1970）, *Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication*, Univ. of Pennsylvania Press Philadelphia, pp.157-158

どちらが好きですか？オンライン授業？教室での授業？

1. オンライン授業はどうでしたか。数字に○をつけてください

わかりにくい ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → わかりやすい

たのしくない ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → たのしい

不便 ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → 便利

もう受けたくない ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → また受けたい

2. どうして もう受けたくないですか

質問ができない/画面が小さい/字が見えない/メモができない

スピードが速い/先生にチェックしてもらえない/目が合わない

インターネットの状況が悪い/音が聞こえにくい/友達に会えない

宿題が多い/おもしろくない

その他 ()

3. どうして また受けたいですか

家でリラックスできる/学校に行かなくていい/movie がわかりやすい

たくさん話せた/わかりやすかった/字が見やすかった

その他 ()

4. オンライン授業の時に使ったものはなんですか

教科書/パソコン/携帯電話/ipad/イヤホン/マイク